平成３０年度
会津若松市男女平等に関する作文コンクール

# 入選作品集

会津若松市

# 目　次

## 平成30年度「男女平等に関する作文コンクール」の審査総評

審査委員長　会津若松市男女共同参画審議会　会長　鈴木　秀子


●小学生低学年の部

最優秀賞　自分らしくいられる社会をめざして　大戸小学校　三年　松尾（まつお）　絆生（はんな）さん…1

優秀賞　男女平どうってなんだろう　一箕小学校　三年　秋山（あきやま）　凪冴（なぎさ）さん…3

優秀賞　お父さんが「お母さん」だった日　門田小学校　三年　板橋（いたばし）　楓流（かえる）さん…5

●小学生高学年の部

最優秀賞　本当の平等とは　謹教小学校　五年　今村（いまむら）　真裕（まゆ）さん…7

優秀賞　力を合わせて　小金井小学校　五年　三瓶（さんぺい）　友菜（ゆな）さん…9

優秀賞　何気ない言葉　謹教小学校　六年　髙橋（たかはし）　紗音（すずね）さん…11

●中学生の部

最優秀賞　男女平等について　第五中学校　二年　佐々木（ささき）　彩花（さやか）さん…13

優秀賞　男女平等に過ごすためには　一箕中学校　二年　作山（さくやま）　綾音（あやね）さん…15

優秀賞　男女平等といえる社会を目指して　会津学鳳中学校　一年　佐藤（さとう）　大波（だいば）さん…17

優秀賞　ちょっとした意識で　河東学園中学校　一年　田崎（たさき）　心粋（こいき）さん…19


※同賞については氏名５０音順です。

※公表の承諾を得た作品を掲載しています。

※各作品の講評は、選考審査を行っていただきました会津若松市男女共同参画審議会委員の皆様によるものです。

# 平成30年度　会津若松市「男女平等に関する作文コンクール」の審査総評

審査委員長　会津若松市男女共同参画審議会
会長　鈴木　秀子

会津若松市は、平成12年に県内初の「男女共同参画都市宣言」を行い、平成16年には「会津若松市男女共同参画推進条例」を施行して、すべての人々が性別にかかわりなく、個性や能力を十分に発揮することができる社会、多様な生き方を互いに認め合い、生きがいを持って自分らしく、安心して暮らせる社会の実現を目指して、さまざまな取組を行ってきました。

その取組の一つが「男女平等に関する作文コンクール」です。子どもたち一人ひとりが性別にとらわれず自分のやりたいことに挑戦する、自分らしさが尊重されるといった男女平等意識の高揚を図ることを目的に募集しています。

今年は353作品（小学生低学年12、小学生高学年85、中学生256）と今までで最も多くの応募があり、審議会において厳正に審査を行い、最優秀賞3作品（各部1）、優秀賞7作品（小学生低学年2、小学生高学年2、中学生3）を選定いたしました。

小学生・低学年の部では、家族が協力して生活している中で感じたお互いを思いやる気持ちや一人ひとりを尊重することの大切さ、小学生・高学年の部では、学校の出来事やニュースから男女平等について関心を持ち、性別による役割分担や将来の職業選択に不平等があってはならないことや自分らしく行動することの大切さ、中学生の部では、日常の出来事から日本社会の現実にまで視野を広げて観察し、男女平等とは何か、男女共同参画の実現のために自分にできることは何かについて考えたことがまとめてありました。子どもたちの純粋な目と心で書かれた作品に頼もしさを感じると同時に、大人の責任を痛感しています。

この作文コンクールをきっかけに、より多くの子どもたちが男女平等や男女共同参画について関心を持ち、性別による固定的なイメージや役割分担にとらわれず、自分らしさとは何か、男女平等とはどういうことか、男女平等のために自分ができることは何かを考え、行動して欲しいと思います。

私たち大人は、一人の人間としてお互いの個性や人格を尊重し合う姿を示し、性別に関係なく様々な活動ができるよう慣行や社会のしくみを考えて、子どもたちが男女平等や男女共同参画の社会が当たり前といえる環境を整えていかなければならないと思いを新たにしています。

最優秀賞

# 自分らしくいられる社会をめざして

大戸小学校　三年　　松尾　絆生

男女びょうどう。なんとなく聞いたことはありますが、びょうどうってなんだろう。同じってことかな。わたしは「びょうどう」について、意味を調べてみました。「さべつがなくみなひとしいことを意味する」とありました。ひとしいとは、さがなく同じことととありました。

みんなひとしい、みんな同じ、そんなことあるのかな。

わたしには妹がいます。ケンカをしたときに、「お姉ちゃんでしょ！」とおこられたことがあります。そんなとき「なんでわたしばかり。ふ公へいだ。」と思うことがありました。でも、妹とわたしでは体の大きさもちがえばできることもちがうから、思いどおりにいかないこともある。だからむりやり物事をおしつけてはいけないよとお母さんに言われました。

男の人と女の人でくらべてみても、体のつくりもちがうし、力もちがいます。女の人も男の人も同じ、男女びょうどうなんてむりなのではないかと思いました。さいきんニュースで、ある大学の入学しけんで、女の人だけ点数をへらされていたというニュースをききました。わたしは女せいなのでそのニュースをきいてとてもずるいと思い、とてもくやしくなりました。女の人はけっこんすると、仕事をやめたり、子どもをうむために長い間お休みすることがあります。そうなると、急にやめられたり、休まれたらこまるので、さい初から女せいはあまりとりたくないという考えの人たちもいると知りました。わたしはとてもかなしくなりました。どんなにがんばっても女せいだから、というりゆうでそんなことになるなんて考えたこともありませんでした。それではいけないと思います。本当は才のうがあるのに、そ

れをはっきできずにつぶされてしまうなんて、もったいないと思います。男の人も女の人も同じ、びょうどうでなくてはいけないと思います。男だから、女だからではなく、人間は一人一人ちがいます。みんな一人一人のう力や考えがちがいます。わたしはせいべつにかん係なく、できないならできることを、自分ののう力を生かせる場所をえらべて、一人一人が自分らしくいられる社会になったら、すてきだなと思います。

---

**講評**

小学生低学年ながら、男女不平等の問題がニュースになっていることに目を向け、作文をまとめたことは大変すばらしいことです。みなさんが大きくなるまでには「せいべつにかん係なくかつやくできる社会」ができると思います。

優秀賞

# 男女平どうってなんだろう

一箕小学校　三年　秋山　凪冴

「ぼくは、黄色がすき。」
と言ったら
「それ女の子の色だよ。」
とわらわれた友だちがいました。
ぼくは、わらわれた友だちがかわいそうでした。いろいろな色があって、どんな色がすきかは、その人の自ゆうだと思いました。
家に帰ってお母さんに聞いてみました。ぼくは赤青緑は男の子、ピンク黄色は女の子らしい色だと思っていたけど、お母さんは
「お母さんが子どものころは、赤は女の子の色だったよ。女の子のランドセルは赤がふつうだった。今の女の子が水色のランドセルが多いのにおどろいた。」
と言っていました。

男らしい、女らしいといってどういう事なんだろうと思いたくさん話しました。仕事も男の仕事、女の仕事があると教えてくれました。
むかしは男の人は外ではたらくから、家事はしない。家事は女の仕事だったそうです。前はほ育しはほ母。かんごしはかんごふと女の人を表すよび方だったそうです。今は、男の人がふえてよび方がかわったと教えてもらいました。ぼくの弟と妹の通うようち園には、男の先生が三人もいます。ぼくのかかりつけのびょういんにも男のかんごしがいます。ぼくにとってはそれは当たり前だけど、ひいばあちゃんは時どき
「いやいや、男のかんごしいっぱいになったな。むかしからは考えらんに。」
と言っています。お母さんは、
「すきな色も、やりたい事も、自分で自ゆうにきめればいいんだよ。」
と言っていました。

時だいごとに男らしい、女らしいはかわっているんだそうです。

ぼくにはまだ男女平どうとか、男らしい、女らしいはよく分かりません。家の中ではお父さんもキッチンに立つし、お母さんものう家の仕事で力仕事をすることがあります。男とか女とかかんけいなく、自分のやりたい事やできる事をがんばって、お母さんやお父さんみたいに、お母さんがいそがしい時はお父さんがあらい物やせんたくをしたり、お父さんが一人では重くて運べない時はお母さんが手伝うみたいに、あい手を大切に思う気持ちが大切なんじゃないかと思いました。男の子の友だちも、女の子の友だちもこれからもっと大切にしていきたいと思いました。

---

**講評**

「男・女らしさとは」を三世代同居の家族にきいた結果はそれぞれに違えども、一様に「男女の違いはない」との答えに安堵した様子が感じられました。小学生低学年ながらも「男女平等」に触れた瞬間だったのではないでしょうか。

優秀賞

# お父さんが「お母さん」だった日

門田小学校　三年　　板橋　楓流

今年の春、ぼくのお母さんがかいだんで足のほねを折りました。

とつぜんに、お母さんが入いんしてしまったので、ぼくたち家族はこまってしまいました。

ぼくの家では、お母さんが赤ちゃんのせわをしたり、ごはんを作ったり、せんたくをしたり、ぼくたちのべん強を見てくれたりしていました。でも、お母さんが家にいなくなってしまって、お父さんが、お母さんのしごとをすることになりました。

いつも、お父さんは、しごとに行っていて、家ではすわっているだけなので、本当にだいじょうぶなのか、ぼくは心配しました。

でも、ぼくたちの遠足の日も、早起きをしておべんとうを作ってくれたし、しごとから帰ってきてから、買い物に行って、夕ごはんを作るのを毎日してくれました。おいしかったです。ほかにも、ゴミを出したり、ねこや鳥のせわをしたり、そうじやかたづけもやっていました。日曜日も、朝ねぼうしないでぼくたちと公園に行ってくれました。ぼくは

「お父さんは何でもできてすごいな。」

と思いました。

でも、そんなお父さんでも、できなかったことがありました。それは、赤ちゃんのせわでした。

お父さんは、月曜日から土曜日まで、毎日しごとをしないといけないので、お母さんみたいに、ずっと赤ちゃんの面どうをみることができませんでした。それに、赤ちゃんは、お父さんになれていないので、ごはんを食べる時も、ねる時も、ずっとずっと泣いていたそうです。しかたがないので、赤ちゃんは、「にゅうじいん」というところで面どうを見てもらいました。

ぼくのお母さんは、しごとに行かないで家にいたけれど、家にはたくさんの仕事があるんだなあ、と思いました。

お母さんが、たいいんしてくるまで、十六日かかったので、家の中はぐちゃぐちゃになってしまったけれども、ぼくたちが、学校もようち園も一日も休まないでいられたのは、お父さんがいっぱいがんばってくれたおかげだと思っています。

お母さんが帰ってきてからは、たまったしごとがあると言って、お父さんの帰りがおそくなってしまって、ぼくがお父さんのかわりに、お母さんの手つだいをしました。大へんでした。とくに、弟がいうことをきいてくれなくてこまりました。

今まで、家では何もしないお父さんだったけれど、お母さんが「こっせつ」して、お母さんのしごとをするすがたを見られてよかったです。

ぼくも、お父さんみたいに、お母さんのしごとができるようになりたいです。

---

**講評**

お母さんの入院というアクシデントがきっかけで、自分もお母さんの仕事ができるようになりたいと思ったのはすばらしいことだと思います。それはお父さんが一生懸命になさったからだと思います。私達大人は、日頃から男の仕事、女の仕事と決めずにお互いが協力して行くところを見せてあげることが大事だと思いました。

最優秀賞

# 本当の平等とは

謹教小学校　五年　今村　真裕

ある日、夕飯を食べながらテレビのニュースを見ていたら、お茶の水女子大学のニュースが取り上げられていました。その内容は、性別は男性でも、心が女性の人を受け入れるというニュースでした。私はとてもおどろきました。心は女性でも、見た目が男性なのに女子大学で受けいれてもいいのかと思ったからです。

次の日、新聞を母が見せてくれたのですが、その記事には「トイレやこうい室はどうするのか」という学生の声が書かれていました。私は、確かに着がえる時に、見ためが男性の人がいたら女性はきっとまどうだろうし、困るだろうなと思いました。まだ受け入れる準備が十分ではないから、こういうぎ問が出てくるのも当たり前です。それに、まだ世の中には、差別もあるので、本人も自分のことを人には言いづらいと思います。でも大学がこのようなことを始めてくれたおかげで、きっと救われる人もいるのではないかと思います。

こんな話を家族でしている時に、母が「ダイバーシティ」という言葉を教えてくれました。はじめて聞く言葉でしたが、「ダイバーシティ」とは、生まれた国などのちがいにこだわらず、様々な人を社会で活用しようという考え方なのだと知りました。たくさんの国から日本に働きに来る人も増えてきていて、生活の仕方や考え方もちがう人たちがいっしょに生きていかなくてはならない時代になったのだそうです。だから、おたがいのちがいをみとめ合って、いっしょに生きていける形を作っていかなくてはなりません。この話を聞いて、私は性別にも同じことがいえるのではないかと思いました。ひとりひとり顔やかみの色もちがうように、性別も男性や女性だという単じゅんな区別だけではないのです。様々な

性別の人がいることを、まずは私たちが知らなくてはなりません。そして、おたがいのちがいをみとめ合い、存在を大切にしようという気持ちを持つことができるようにもならなくてはいけません。そうすれば、今まで暗い気持ちでしか生きることのできなかった人も、明るい気持ちで毎日を過ごすことができるようになって、よりよい社会ができあがっていくと思います。

これは、男女平等の考え方にもつながると思います。本当の平等とは、男女で何でも同じようにすることを言うのではなく、それぞれの特ちょう（良さ）を生かすことだと私は思います。男性、女性、そしてそのどちらにもあてはまらない人も、それぞれの持つ特ちょうを生かし、おたがいをみとめ合い、それぞれができることをして、足りないことをかばいあうことが、本当の平等で、それがよい社会につながるのではないでしょうか。少しみんなの気持ちが変われば、きっと気持ちよく過ごすことのできる社会ができるはずです。

**講評**

ニュースに関心を持ち、そのことを家族で話題にした体験としっかりとした自分の意見が述べられています。また、そこから「本当の平等とは」にまで考えを広げ、まとめているところがすばらしい作文です。

優秀賞

# 力を合わせて

小金井小学校　五年　三瓶　友菜

「女だからゆめをあきらめなければいけないのですか？」

先日私は、こう言って泣いている女の人をニュースで見た。ある大学の入学試験のニュースだった。

女の人は結婚したり赤ちゃんを産むと、しごとを続けるのがむずかしくなるから、男の人がたくさん合格するようにしているということだった。私はこれを聞いて、かってに女の人のゆめをうばっていてひどいなと思った。ゆめをうばうのではなくて、どうすれば結婚しても赤ちゃんが生まれても、はたらくことができるかを考えていけばよいのに。

私のお母さんも仕事をしている。帰ってくるのはいつもおそく、仕事をするのは大変な事だと思う。私の家ではお母さんより早く帰ってくるお父さんが夜ご飯を作る。

「何を作るか考えるのが大変だ。」と言いながら、昼休みにクックパッドを見たり、同じ仕事のおばさんたちと料理の話をしているそうだ。そこで何を作るか考えて買い物をして帰ってくるらしい。

お父さんが作った料理はおいしい。中でも私が好きなのはポテトサラダだ。お母さんは仕事から帰ってくると

「おいしい。ありがとう。」

と言いながらうれしそうにご飯を食べる。かんしゃの言葉は大事らしい。ご飯の後の食器洗いはお母さんがやる。時々、私もお皿洗いや米とぎ、おふろそうじを手伝う。お父さんとお母さんは

「助かるな。ありがとう。」

と言ってくれる。そう言われると私のやる気パワーが満々になる。

休みの日には、お母さんが電球をこうかんしたり、エアコンのそうじをしたり、

「うちはパパがママで、ママがパパみたいだね。」と言いながら家の中のいろんなことをしている。私はそれを見て、男の仕事、女の仕事なんてないのだと思う。自分が出来ることを協力してやるということが大事なのではないのだろうか。

私のゆめは家具作りの職人さんだ。去年、市でやっている「地産池消まつり」に行った時に、初めてカンナという道具を使って木をけずり、わりばしを作ったことで作る楽しさを感じたからだ。

私もお母さんのように、けっこんしても仕事をしたいと思っている。女だからできることだってあると思う。男の人も女の人も平等に勉強して、ゆめに向かって努力し、ゆめをかなえて仕事をつづけるためには、助け合うことが大切だと私の家族をみて思う。男に生まれたこと、女に生まれたことにはきっと意味がある。男でも女でも自分を大切にして生きていける社会になればいいなと思う。私も明るく楽しい自分でいられるように、ゆめに向かってがんばりたい。

**講評**

自分の家庭のご両親が、協力し合っている姿を、しっかりと見ているのですね。あたたかい空気が伝わってくるようです。男の仕事、女の仕事なんてない、男女平等に夢に向かって、明るく楽しく生きていきたいと思う姿に共感します。とても頼もしいと思いました。

優秀賞

# 何気ない言葉

謹教小学校　六年　髙橋　紗音

ある日、グループで給食を食べている時に、男子が、

「おれさあ。今度みんなの前で発表しなきゃいけないんだけど、できるかなあ。」

と心配そうに言いました。それを聞いていたもう一人の男子が、

「出来るって。だって、お前男だろ。」

と言いました。そして、私も、

「そうだよ。男子なんだから、がっとやれば出来るって。」

と言いました。それは、不安に思っている男子のことを、励ますつもりで言った、何気ない言葉でした。でも、後で思い返した時、もっと他の言葉があったのではないかと思い始めました。

もし私が悩んでいる時に「女なんだから」と言われたらどんな気持ちになるでしょう。「何でそんな風にいうのかな。男とか女とか関係ないじゃん。」と思うと思います。

私は五年生の時に受けた、人生講座という授業のことを思い出しました。

そこでは「外国では、女性で、国の代表者である首相になる人がいる」「赤ちゃんを産んだ後、夫が育児をして、妻が職場に復帰することもある」などの話を聞きました。そして、日本の男女平等の意識が、欧米に比べて低いことを知りました。ついこの前ニュースになった、東京医科大学の入試で、女子の点数を下げていたこともその一つの現われなのでしょう。私は、自分では選ぶことが出来ない性別によって、人としてのあつかいのちがいがあることに、嫌な気持ちになりました。そして、自分のことは、男女を平等に見ている人間だと、自信を持っていました。

けれど、実際はちがいました。悩んでいる男子に対して、「男なんだから」という言葉だけで、励ましそうとしていたのです。自分でも知らないうちに、心の中に、男女で区別している気持ちがあったことに驚きました。それは、大きく考えれば、男女平等に対する日本の意識の低さの一部ではないかと感じました。

人生講座の最後に、先生が、

「男のくせに、女なのに、という言葉は、男は男、女は女というしばりです。皆さんは、しばりを持たない人になってほしいです。そういう言葉に気を付けましょうね。」

と、おっしゃいました。

もし、あの給食の時間に戻れるなら、「〇〇君ならできるよ。」「私も同じだよ。家で練習するといいよ。」と言ってあげたいです。

今は、何か悩んでいる友達がいたら、性別ではなく、まずその子自身を見て、一緒に考えたりアドバイスをしてあげたりすることをこころがけています。

そして、先生がおっしゃったように、男女のしばりになるような、何気ない言葉に気をつけていきたいと思います。

**講評**

男女を区別する意識が自分にもあったことに気づき、性別に関係なく、その人自身のことを考えようとする気持ちの変化がよくわかりました。こうしていきたいという具体的な目標も考えられていてよかったと思います。

最優秀賞

# 男女平等について

第五中学校　二年　佐々木　彩花

私は今年のニュースで報道されたもので、男女平等について考える出来事がありました。それは、土俵に女性が上がれないことです。京都の舞鶴市で行われた相撲大会にて、市長が挨拶をしている最中に意識を失って倒れてしまい、その場にいた現役看護師の女性が即座に救命措置に入ったときのことです。相撲の伝統や規則を重んじることはもちろん大切なことだと思いますが、この場合は人命が一番に優先されるべきです。しかし、救命措置をしているにも関わらず、アナウンスで女性に土俵から降りるように促されたのです。伝統は確かに大切かもしれませんが、今回のようなハプニングがあった時のために、時代に則った形でルールを変えていくことも必要ではないかと思います。

このような男女差別は、昔よりは良くなっていると聞きます。ですが、まだまだ改善すべき点がたくさんあると思います。例えば、国会議員に女性が少ないと、男性的な考え方になりかたよった社会になって、女性の活躍する機会が少なくなってしまいます。その結果、男女差別がさらにひどくなってしまいます。

私の回りの男女差を考えてみると、女医さんが少ない、警察官の女の人が少ない、女性の校長先生が少ないなどたくさんあります。女性や男性という性別で考えるのではなく、その人の個性や能力で考えるべきだと思います。その人の個性や能力は性別では判断できない。男性がすべきという考えがある仕事でも、男性よりも女性の方が優れているということもないとは言いきれない。それは性別に関係なく、その人の能力次第だからです。

これからの地域を支え、発展させるには、男女ともに性別関係なく能力を発揮できる社会が必要だと思いま

す。そのためには、男性、女性という性別だけで判断する誤った考えを改める必要がある。私たちが性別だけで判断するという考えを捨て、新たに学び直し、意識する事が大事ではないか。そうすることにより、男性、女性が性別を気にする事なく個性や能力を発揮できる社会の現実につながると思います。

まずは、私達が、旧来の考えを捨て、個性や能力で考えるということを身に付けなければならない。誰もが、個性や能力を十分に発揮した豊かで充実した、やりがいのある社会の実現につながる第一歩といえるのではないだろうか。

---

**講評**

男女平等であると思われがちな現代社会の中で、実際にあった事案や社会状況を女性の視点から的確に捉え、素直に表現されています。今後、男女平等である社会を目指すために、どうあるべきかについても適切に記載されています。

優秀賞

# 男女平等に過ごすためには

一箕中学校　二年　　作山　綾音

男女平等に過ごすためには、どうすれば良いのだろうか。

そもそも、男女平等に過ごすのは難しいのではないか、と私は考えている。それは、身長や体重などの体格差、筋力などの力の差が男女少なからずあることだ。これは、男女を比べると大きな差になってしまうことが多い。この様なことから考えても、不平等だといえるだろう。やはり男女だと、こういう差は必ずあるのだ。

しかし、体格や力の差を比べるのではなく、その人の能力・才能・人柄など、全てをふまえたうえで男女平等に接し、過ごしていくことが大切であると思う。

また、これは私の考えだが、男女平等に過ごすためには、「男子だから」「女子だから」という考えをまず正すことが必要だと、私は思う。

例として、「レディーファースト」という言葉をあげてみよう。女子「だから」と、優先するのは少し違う気がする。もちろん、妊婦などは例外だと考える。しかし、電車などで、けが人や高齢者に席を譲ることに、男女は問わないだろう。このように、女子ではなく、本当にそれを必要とする人を優先することが大切だと思う。

また、女だから泣いて良いという訳ではない。これはあくまで推測だが、「女は泣けば許される」と思っている男子も多いのではないだろうか。そして、もし「女子＝弱い」という公式が出来上がっているのなら心外である。今どきの女子は、強くあろうとする。決して弱みは見せない。それは、男子と対等な立場で自分を評価してほしいと思っているからなのではないかと、今回初めて思った。だからこそ、男子には、女子と対等な立場で接してほしいとも思う。それが、男女平等に過ごすことへの第一歩となるだろう。

私は、男女平等に過ごすのは難しいと考えた。しかし、考えが変わった。

今回私は、差を差と捉えず、他人を受け入れ、比べることをしないということ、次に、女子（男子）だから～だろう、という憶測をやめ、差別の意識を無くすこと、そして、男女共に、対等な立場で接するということ、この三つの考えをもった。この三つのことについて考え、意識して生活することで、男女平等に過ごすことができるのではないかと思う。

これからは、男女だから、といった偏見をもたず、それぞれが対等の立場で接することが大切だ。今回もった考えを忘れず、今後の学校生活にいかしていきたい。

男女平等に過ごせるようになる可能性は、高いと言って良いだろう。

---

**講評**

文中から、男女平等の理解が学校教育で促進されており、児童・生徒の日常生活に浸透していることを感じました。個人の能力、才能、人柄に着目し、三つの考えをもったことは、大変良いと思います。今後の経験でその考えが変わるかもしれませんが、これからの学校生活、また社会に出てからの活躍を期待します。

優秀賞

# 男女平等といえる社会を目指して

会津学鳳中学校　一年　佐藤　大波

「ジェンダーギャップ指数」という言葉を知っているだろうか。それは、経済参画、政治参画、教育、健康の分野で男女平等の度合いを指数化して、順位を決めるものである。

僕は、日常生活の中で、それほどまでに男女の格差を感じたことがなかった。なぜなら、家庭では、食事の支度や洗濯などの家事は、出来る時に、出来る人がやる。父も母もあたり前のように仕事もするし家事もしている。性別により役割分担がある訳ではない。

また、学校生活でも男女の区別なくみんなが同じように勉強したり、やりたいことに積極的に取り組んでいるからだ。

しかし、調べてみると、僕が住んでいる日本は、世界からみると、ジェンダーギャップ指数がとても低い事が分かった。先進国であるはずの日本が、なぜこんなにも低い数値なのか、僕はとても不思議に思った。

最近、ある大学の医学部の入試において、女子の合格率を抑えるために、女子の点数を一律に減点し、男子を優遇するという措置がとられてきたというニュースを見た。それは、女性は大学を卒業して医師になっても、妊娠や出産で離職する率が男性に比べて高いからという偏った考えによるものだ。

「将来医師になりたい」と思い受験したのに、このような考えを持つ一部の人により不合格になった女性もいるだろう。夢に向かって一生懸命勉強し、努力した事が、男女差別の考えによって全て無駄になってしまったと分かったら、どんな気持ちになるだろう。僕はとても腹立たしく、そして悲しくなった。今まで平等であると感じていた教育の分野で、未だにこのような男女差別の考え方があることに、とても驚いたと同時に、絶対にあってはならないことだと思った。僕

たちは、誰もが平等に教育を受ける権利がある。男だからとか、女だからとかいう理由で不平等であってはならない。今後、このような問題が起こらないためには、どうしたら良いのだろうか。

また、性別にとらわれずに、なりたい職業に就き、個々に輝ける社会を作っていくためには、どうしたら良いのだろうか。

僕は、お互いの個性を認め合い、協力しながら生活していくことが大切ではないかと考える。小さなことだが、僕たち一人一人が、少しずつでもこのような意識を持って生活していけば、今回の入試のようなことは起こらないだろう。夢を持ち、目標に向かって努力した事が、結果につながる明るい社会。本当の意味での「男女平等」と言える社会を目指して、これからは声をあげていきたいと思う。

---

**講評**

長い歴史や生活慣習を短期間で改善することは、容易いことではありません。皆さんのような意識を持つ人が増えていけば、近い将来日本の「ジェンダーギャップ指数」も上がって来るものと期待しています。

優秀賞

# ちょっとした意識で

河東学園中学校　一年　田崎　心粋

男女平等。世の中の人々のほとんどが、男女平等といっているくせに、その本人が男女平等を言葉や行動にできていないと思う。

そこで、日本の男女平等のランクが気になり調べてみた。経済、教育、政治、健康の四つの分野で分析し、ランキング化しているもので、なんと一一四位と、予想以上に最悪な結果に私はおどろきをかくせなかった。

男女平等な世の中にするには、まず、男が働き女が家事や育児をするという考えを捨てるべきだと思う。今は、昔と比べると差別はなくなり、男女関係なく仕事に就けるようになって、とても暮らしやすい世の中になった。だが、私の両親は共働きだが、母だけが家事をし、父はなに一つやらない。あげくのはてに、あれが食べたい。ここが汚い。服のにおいが気に入らないなどと文句ばかり言っている。私はそんな父に少し腹が立っていた。父の母に、父のことを話すと、「パパはがんばって働いているから、疲れているんだよ。」と言うのだ。母だってがんばって働いているのにと思う。また、父によく、「女なんだからママの手伝いたくさんしなさい」と言われる。なぜ女の子だから手伝いをたくさんしなければならないのか、男はなにもやらなくていいのか。私はとても不満に思う。

また、男のくせにスカートをはいているだとか、化粧をしているのがおかしいという考えも捨てるべきだと思う。このことに関しては、私もまだできていないことだ。この前家族と出かけた時、ワンピースを着て、化粧をしている男の人を見た。その人を見て、弟とつい「気持ち悪い、おかしい。」と言いあってしまっていた。また、弟が私の服を着ているのを見たおばあちゃんは、「男のくせに気持ち悪い格好をして、そんな大人になったら恥ずかしいよ。」と言った。弟の場合悪ふざけでやって

いたが、世の中には、男装をしたり女装をしたりする人々がたくさんいる。それが、その人の個性だったりする。なのに、恥ずかしいとか、変わっている人だとか、そんな発言を私はとても不満に思う。

男女平等な世の中がいつまでもできないのは、昔の人々の考えが受け継がれていくことに原因があると思う。もちろん良い事は受け継いでいくべきだが、男はこうだ、女はこうだという考えは、今この時代で変えていかなければ、男女平等な世の中はできないだろう。

また、一人一人がおたがいのことを認め合い、支えていくことが男女平等な世の中につながっていくと思う。女だから家事をやるじゃなくて、男も女も平等に仕事をして、家事をして、育児ができる世の中へ。男だから、女だからという理由で、自分らしさを失うことのない世の中へ。私たちのちょっとした意識で変えていこう。そして、ちょっとした意識で世界が平和になるように。笑顔が増えるようにと願っています。

---

**講評**

実体験を基にした着眼点・切り口がとても面白く、好感がもてる文章だと思います。

一人一人の意識改革と行動によって、平等を成し遂げようという考え方は、私達大人も見習うべきところがあるのではないでしょうか。

# 男女共同参画都市宣言

（市制百周年記念）

美しい自然と確かな歴史、豊かな文化に恵まれた会津若松市の市民として、誇りと自信を持ち、男女の平等を基本理念に、「男女共同参画都市」を宣言します。

1　わたしたちは　性別にとらわれず、ひとりひとりの人権が尊重され、個性と能力が生かせる会津若松市をめざします。

1　わたしたちは　お互いを認めあい支え合って、あらゆる分野に男女が共同で参画でき、いきいきと暮らせる会津若松市をめざします。

1　わたしたちは　共に手をとりあい、かけがえのない地球の環境を守り、平和で豊かな会津若松市をめざします。

2000年2月27日

会津若松市

**発　行**　　平成３１年１月

**会津若松市企画政策部 企画調整課　協働・男女参画室**

〒965-8601　会津若松市東栄町3番46号
TEL.0242-39-1405　FAX.0242-39-1400
http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/
この作品集は市のホームページでも掲載しています